日本本土空襲の概要

北海道

東北

関東

中部

近畿

中国・四国

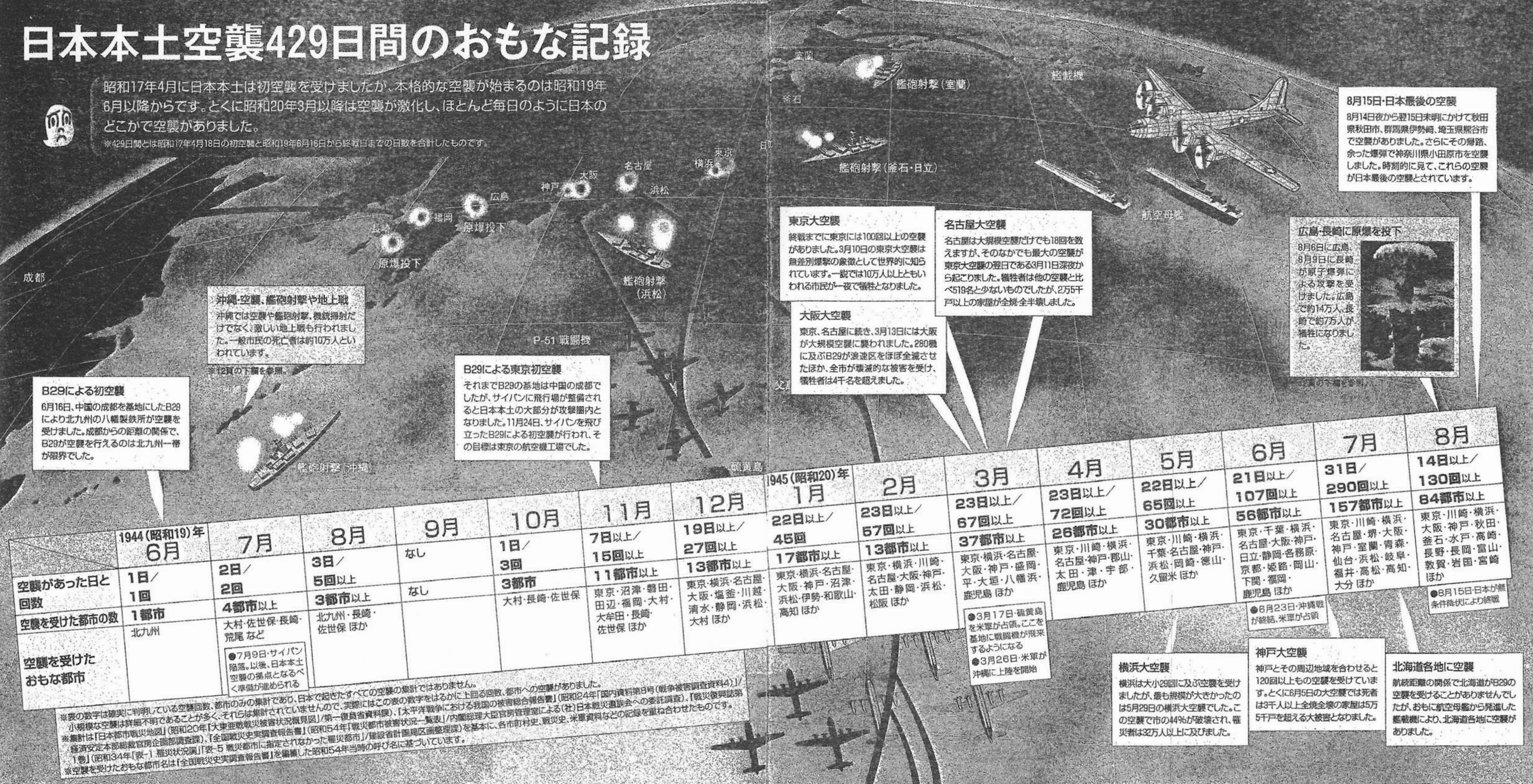
九州

全国空襲被害者連絡協議会

日本本土空襲429日間のおもな記録

昭和17年4月に日本本土は初空襲を受けましたが、本格的な空襲が始まるのは昭和19年6月以降からです。とくに昭和20年3月以降は空襲が激化し、ほとんど毎日のように日本のどこかで空襲がありました。

※429日間とは昭和17年4月18日の初空襲と昭和19年6月16日から終戦日までの日数を合計したものです。



8月15日・日本最後の空襲

8月14日夜から翌15日未明にかけて秋田県秋田市、群馬県伊勢崎、埼玉県熊谷市で空襲がありました。さらにその帰路、余った爆弾で神奈川県小田原市を空襲しました。時刻的に見て、これらの空襲が日本最後の空襲とされています。

広島・長崎に原爆を投下

8月6日に広島、8月9日に長崎が原子爆弾による攻撃を受けました。広島で約14万人、長崎で約7万人が犠牲になりました。

（※12頁の下欄を参照）

名古屋大空襲

名古屋は大規模空襲だけでも18回を数えますが、そのなかでも最大の空襲が東京大空襲の翌日である3月11日深夜から起こりました。犠牲者は他の空襲と比べ519名と少ないものでしたが、2万5千戸以上の家屋が全焼・全半壊しました。

東京大空襲

終戦までに東京には100回以上の空襲がありました。3月10日の東京大空襲は無差別爆撃の象徴として世界的に知られています。一説では10万人以上ともいわれる市民が一夜で犠牲となりました。

大阪大空襲

東京、名古屋に続き、3月13日には大阪が大規模空襲に襲われました。280機に及ぶB29が浪速区をほぼ全滅させたほか、全市が壊滅的な被害を受け、犠牲者は4千名を超えました。

沖縄・空襲、艦砲射撃や地上戦

沖縄では空襲や艦砲射撃、機銃掃射だけでなく、激しい地上戦も行われました。一般市民の死亡者は約10万人といわれています。

※12頁の下欄を参照。

B29による初空襲

6月16日、中国の成都を基地にしたB29により北九州の八幡製鉄所が空襲を受けました。成都からの距離の関係で、B29が空襲を行えるのは北九州一帯が限界でした。

B29による東京初空襲

それまでB29の基地は中国の成都でしたが、サイパンに飛行場が整備されると日本本土の大部分が攻撃圏内となりました。11月24日、サイパンを飛び立ったB29による初空襲が行われ、その目標は東京の航空機工場でした。

	1944（昭和19）年 6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1945（昭和20）年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
空襲があった日と回数	1日／1回	2日／2回	3日／5回以上	なし	1日／3回	7日以上／15回以上	19日以上／27回以上	22日以上／45回	23日以上／57回以上	23日以上／67回以上	23日以上／72回以上	22日以上／65回以上	21日以上／107回以上	31日／290回以上	14日以上／130回以上
空襲を受けた都市の数	1都市	4都市以上	3都市以上	なし	3都市	11都市以上	13都市以上	17都市以上	13都市以上	37都市以上	26都市以上	30都市以上	56都市以上	157都市以上	84都市以上
空襲を受けたおもな都市	北九州	大村・佐世保・長崎・荒尾 など	北九州・長崎・佐世保 ほか		大村・長崎・佐世保	東京・沼津・磐田・田辺・福岡・大村・大牟田・長崎・佐世保 ほか	東京・横浜・名古屋・大阪・塩釜・川越・清水・静岡・浜松・大村 ほか	東京・横浜・名古屋・大阪・神戸・沼津・浜松・伊勢・和歌山・高知 ほか	東京・横浜・川崎・名古屋・大阪・神戸・太田・静岡・浜松・松阪 ほか	東京・横浜・名古屋・大阪・神戸・盛岡・平・大垣・八幡浜・鹿児島 ほか	東京・川崎・横浜・名古屋・神戸・郡山・太田・津・宇部・鹿児島 ほか	東京・川崎・横浜・千葉・名古屋・神戸・浜松・岡崎・徳山・久留米 ほか	東京・千葉・横浜・名古屋・大阪・神戸・日立・静岡・各務原・京都・姫路・岡山・下関・福岡・鹿児島 ほか	東京・川崎・横浜・名古屋・堺・大阪・神戸・室蘭・青森・仙台・浜松・岐阜・福井・高松・高知・大分 ほか	東京・川崎・横浜・大阪・神戸・秋田・釜石・水戸・高崎・長野・長岡・富山・敦賀・岩国・宮崎 ほか

●7月9日・サイパン陥落。以後、日本本土空襲の拠点となるべく準備が進められる

●3月17日・硫黄島を米軍が占領。ここを基地に戦闘機が飛来するようになる
●3月26日・米軍が沖縄に上陸を開始

●6月23日・沖縄戦が終結、米軍が占領

●8月15日・日本が無条件降伏により終戦

※表の数字は確実に判明している空襲回数、都市のみの集計であり、日本で起きたすべての空襲の集計ではありません。小規模な空襲は詳細不明であることが多く、それらは集計されていませんので、実際にはこの表の数字をはるかに上回る回数、都市への空襲がありました。

※集計は『日本都市戦災地図』（昭和20年『大東亜戦戦災被害状況概見図』/第一復員省資料課）、『太平洋戦争における我国の被害総合報告書』（昭和24年『国内資料第8号（戦争被害調査資料4）』/経済安定本部総裁官房企画部調査課）、『全国戦災史実調査報告書』（昭和54年『戦災都市被害状況一覧表』/内閣総理大臣官房管理室による（社）日本戦災遺族会への委託調査）、『戦災復興誌第1巻』（昭和34年『表-1 罹災状況調』『表-5 戦災都市に指定されなかった罹災都市』/建設省計画局区画整理課）を基本に、各市町村史、戦災史、米軍資料などの記録を重ね合わせたものです。

※空襲を受けたおもな都市名は『全国戦災史実調査報告書』を編纂した昭和54年当時の呼び名に基づいています。

横浜大空襲

横浜は大小29回に及ぶ空襲を受けましたが、最も規模が大きかったのは5月29日の横浜大空襲でした。この空襲で市の44%が破壊され、罹災者は32万人以上に及びました。

神戸大空襲

神戸とその周辺地域を含わせると120回以上もの空襲を受けています。とくに6月5日の大空襲では死者は3千人以上全焼全壊の家屋は5万5千戸を超える大被害となりました。

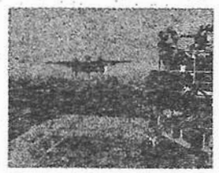
北海道各地に空襲

航続距離の関係で北海道はB29の空襲を受けることがありませんでしたが、おもに航空母艦から発進した艦載機により、北海道各地に空襲がありました。

日本本土空襲の推移・段階のあらまし

日本本土初空襲・ドゥーリットル爆撃隊 1942年4月18日

日本軍の真珠湾攻撃の仕返しに、アメリカは日本本土への空襲を計画しました。それは航空母艦から陸上用の大型爆撃機を発進させる奇想天外な作戦でした。昭和17年4月18日、ドゥーリットル中佐が率いる16機のB25爆撃機は東京、川崎、横須賀、名古屋、四日市、神戸へと分散し、各地を空襲しました。日本人にショックを与えることが目的なので空襲の規模は小さなものでしたが、被災地で約50名が犠牲となりました。



写真・上／米空母ホーネットから日本初空襲に向かうB25爆撃機。
写真・下／発進前、投下する爆弾に日本からもらった勲章を結びつけるドゥーリットル中佐

B29による本格的な空襲のはじまり 1944年6月以降

第1段階　軍需工場を狙った精密爆撃

初期の空襲は製鉄所や軍需工場、軍の飛行場などの特定施設を限定的に狙った「精密爆撃」といわれる方法でした。しかし、特定の場所のみを爆撃するということは難しく、効果も上がらなかったため、この方法は昭和20（1945）年2月末頃を最後に行われなくなりました。

第2段階　大都市の一挙せん滅をめざした無差別爆撃

これまでの爆弾から焼夷弾に切り替え、無差別じゅうたん爆撃により一気にまちを焼き払うようになりました。その皮切りが東京大空襲でした。以後、日本のおもな大都市は焼夷弾により焼き尽くされてしまいました。

第3段階　目標は地方の中小都市へと拡大

日本のおもな大都市が壊滅状態となると、全国の中小都市へと空襲が広がりました。昭和20（1945）年6月以降、空襲の場所や回数が増えているのはこのためです。日本を徹底的に焼き尽くそうとしたのです。

おもな艦砲射撃の一覧

昭和20（1945）年7月になると米英の戦艦部隊による艦砲射撃が行われるようになりました。その頃の日本には対抗できる海軍力がなかったので、たやすく沿岸に迫り、堂々と攻撃を仕掛けてきました。
以下がおもに艦砲射撃ですが、このほか沖縄では上陸作戦を支援するために熾烈な攻撃が連日行われました。

- 7月14日　宮城県釜石市の製鉄所など
- 7月15日　北海道室蘭市の製鉄所など
- 7月17日　茨城県日立市の軍需工場など
- 7月18日　千葉県白浜町のレーダー基地など
- 7月27日　和歌山県新宮市の市内
- 7月29日　静岡県浜松市の軍需工場など
- 7月31日　静岡県清水市の市内

艦砲射撃を行ったアメリカのアイオワ級戦艦

日本の空襲被害

（年のない月日はすべて1945年）

凡例
- B29
- 艦砲射撃
- B25
- 空母
- 艦上機

北海道 死者 900人
室蘭市
艦上機による空襲と艦砲射撃で大被害をうけた（7月14日・15日）
艦上機2000機が来襲、機銃掃射し、爆弾を投下する（7月14日・15日）

沖縄 死者 666人（1944年10月10日）
悪石島
疎開船対馬丸が米潜水艦の攻撃で沈没、学童700人を含む1500人が死亡（1944年8月22日）

青森 死者 747人
青森市
空襲予告のビラがまかれたあとB29来襲、市の中心部は全滅した（7月24日）

秋田 死者 104人
艦上機2000機あまりが来襲、東北一帯に機銃掃射（7月14日・15日）
秋田市
敗戦前日の8月14日夜、郊外の土崎日本石油製油所が爆撃される

岩手 死者 571人
釜石市
日本本土で最初の艦砲射撃をうけた（7月14日）

山形 死者 16人
宮城 死者1081人
仙台市
「東京以北で最上の目標都市」とされて空襲、全市を破壊された（7月10日）

福島 死者 483人
郡山市
東北地方ではもっとも早く本格的な空襲をうけた（4月12日）

新潟 死者1150人
福井市
約2時間の空襲で全市の96%の家屋が焼失した（7月19日）

富山 死者2275人
石川
福井 死者1801人

栃木 死者 557人
群馬 死者1154人
熊谷市
敗戦前日の空襲で埼玉県最大の被害をだした

長野 死者 40人
岐阜 死者 942人

埼玉 死者 331人
茨城 死者1900人
東京
3月10日の大空襲で10万人近い死者をだした

山梨 死者1027人
東京 死者97048人
神奈川 死者6033人
千葉 死者1336人
1942年4月18日、B25が東京・横浜・川崎・横須賀・名古屋・神戸を初空襲

滋賀 死者 35人
三重 死者 2946人
愛知 死者12264人
静岡 死者6090人
浜松市
目標地爆撃ができなかったり、爆弾があまったりすると、"ごみ捨て場"のごとく浜松に落とされた。
名古屋市
愛知時計電機工場ではわずか10分間の空襲で、動員女学生を含め2700人が死亡した（6月9日）
四日市から伊勢に至る海岸線は、米軍の上陸作戦の対象として攻撃が強化された

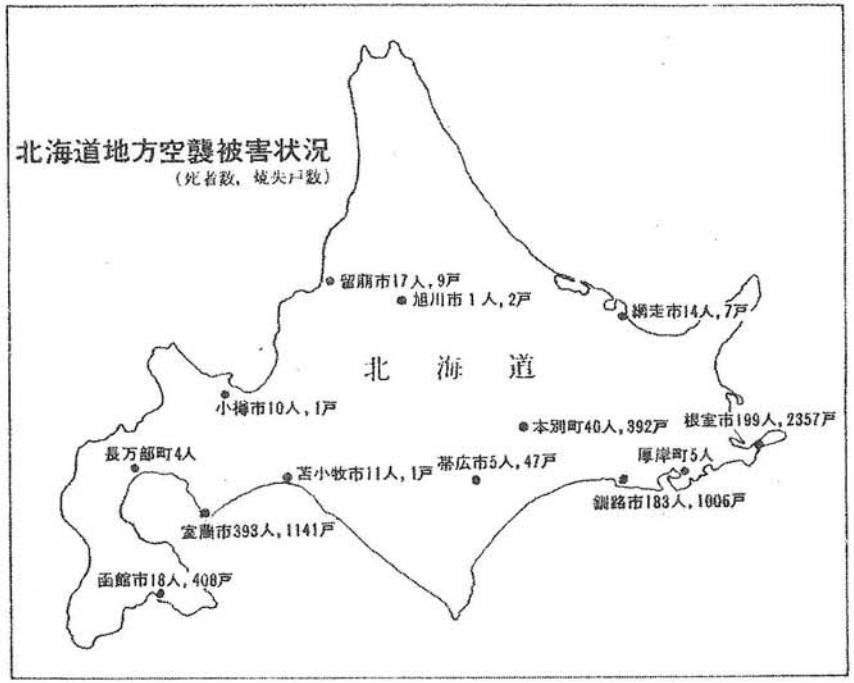
鳥取 死者54人
島根
広島 死者120948人
広島市
ウラニウム爆弾が落とされた（8月6日）
岡山 死者1745人
兵庫 死者12341人
京都市
6回の空襲で死者82人がでた
京都 死者 291人
大阪 死者12931人
奈良 死者 4人
和歌山 死者 1568人

山口 死者2490人
八幡
B29がはじめて日本本土に姿を現し、八幡製鉄所を爆撃（1944年6月16日）
関門海峡
5500個もの機雷が投下され、300隻以上もの船が沈没した

福岡 死者4145人
佐賀 死者51人
長崎市
プルトニウム爆弾が落とされた（8月9日）
長崎 死者 1581人
大分 死者 381人
熊本 死者 634人
鹿児島 死者4041人
鹿児島市
時限爆弾が投下され、いつとも知れぬ爆発に市民は恐怖をつのらせた（4月21日）
宮崎 死者 505人
延岡市
農業県宮崎の唯一の軍需工場地帯のためにねらわれた

香川 死者 230人
愛媛 死者1200人
高知 死者 401人
徳島 死者1144人
四国は県都が中心にねらわれ、高松市が最大の被害をだした
姫路市
大空襲で市街は壊滅したが、姫路城は残った
大阪市
7回も大空襲があり、8月14日までつづいた

北海道地方の空襲



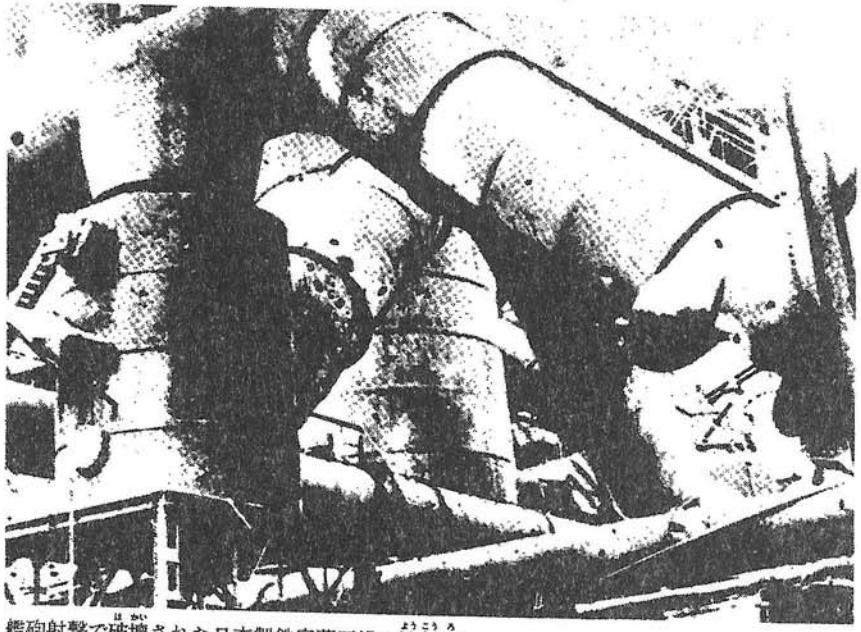
北海道空襲は、一九四五年（昭和二〇年）七月一四日と一五日の米機動部隊の艦上機による各地空襲と、同一五日の艦砲射撃による室蘭空襲がある。

下北半島東方海上の一三隻の空母から飛びたったグラマンF6F戦闘機など二〇〇〇機（延べ）は、七月一四・一五日、北海道や東北地方を大空襲した。攻撃目標は、青函連絡船、輸送船、港湾施設、鉄道、工場、基地、市街地などで、爆撃と機銃掃射によるものだった。

被害が大きかったのは根室（船一隻が沈没して死者・行方不明者が一〇〇人以上でた）、釧路、室蘭には艦砲射撃もあった。ほかに函館、本別、網走なども空襲され、総計、死者八九六人、負傷者六四八人、焼失家屋約五四〇〇戸を出した。

室蘭への艦砲射撃は朝九時半から一時間ほどつづき、大気をひき裂くヒュルルルという飛来音に、身をちぢめる人が多かった。

燃える根室市の住宅街



艦砲射撃で破壊された日本製鉄室蘭工場の溶鉱炉

東北地方の空襲

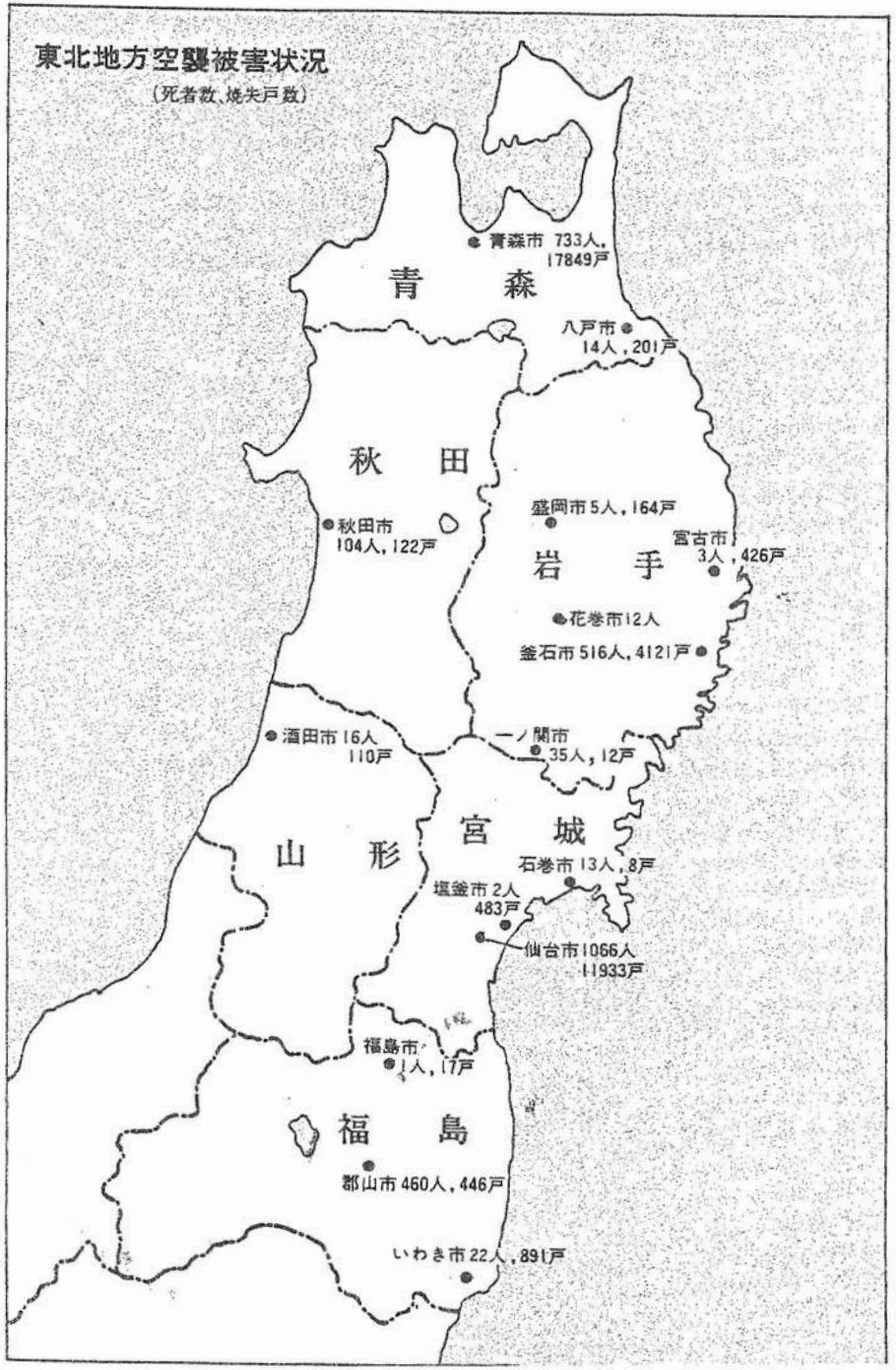
外かべだけとなった青森電話局

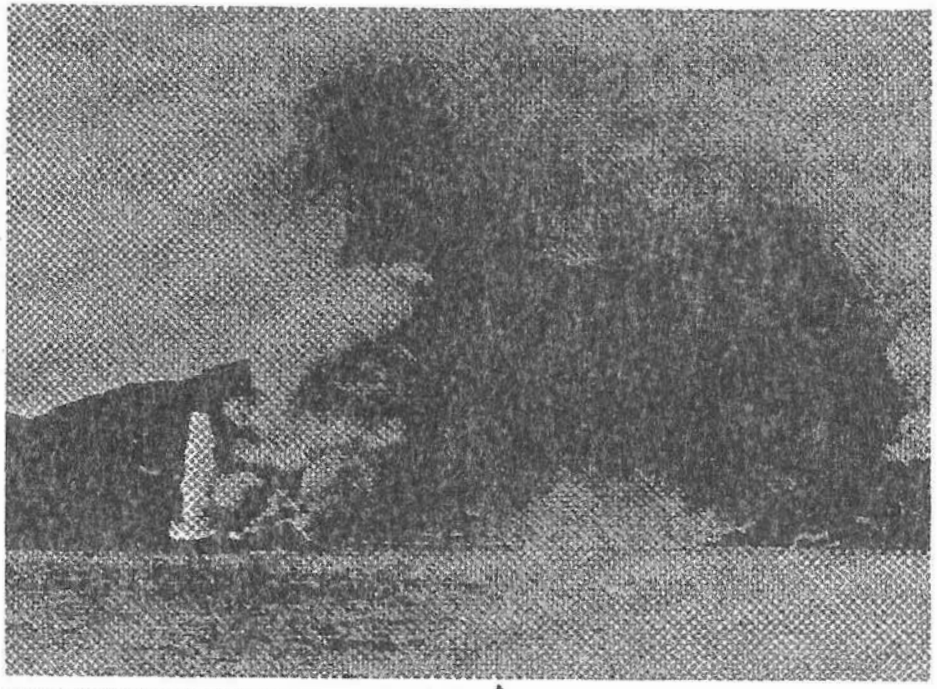
東北地方への空襲は、一九四五年（昭和二〇年）七月と八月に集中した。七月九日と二八日には、B29爆撃機による都市焼夷弾爆撃が仙台と青森に加えられ、七月一四、一五日と八月九、一〇日は東北全域にわたり艦上機約二〇〇〇機（延べ）によって銃爆撃があった。そのほかにも、釜石には艦砲射撃が、郡山や秋田市土崎の軍需工場には精密爆撃がおこなわれた。

さらに〝臨機目標＝オポチュニティ〟といって、B29一機ないし数機があまった爆弾をいきあたりばったりに落としていく空襲が早くからあり、塩釜、盛岡、平（現在のいわき市）などがこの通り魔的な被害にあっている。

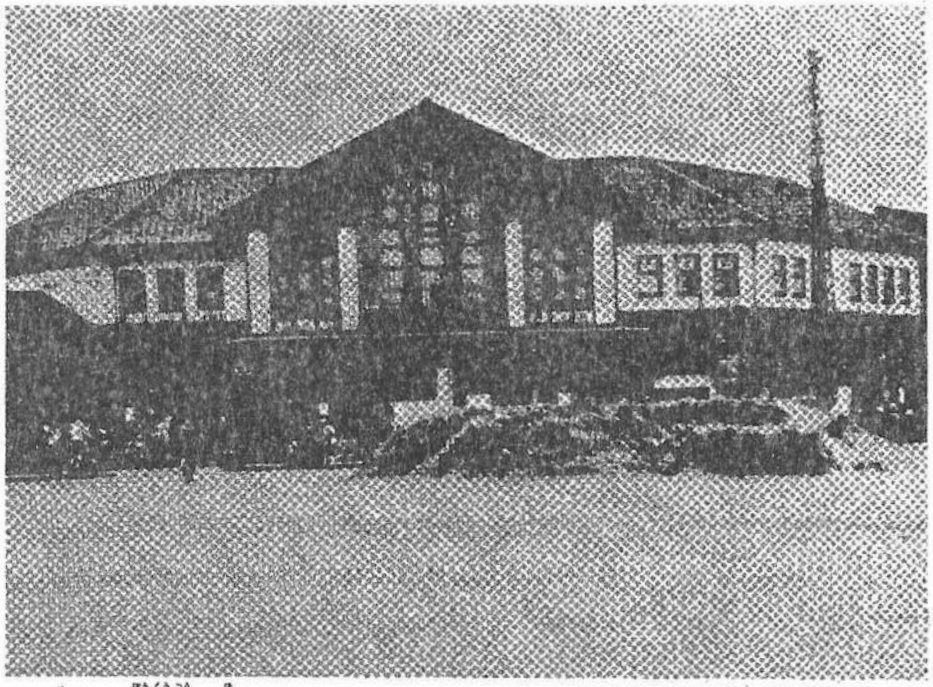
東北の空襲第一号は、一九四四年（昭和一九年）一二月二九日のB29一機による塩釜空襲、本格的には一九四五年四月一二日のB29一四一機による郡山空襲で、このときは保土谷化学、郡山化学工場がねらわれた。

郡山空襲の三ヵ月後、七月九～一〇日に仙台空襲があり、B29一二三機が来襲し、死者一〇六六人を出した。青森市空襲は七月二八日夜のこと、B

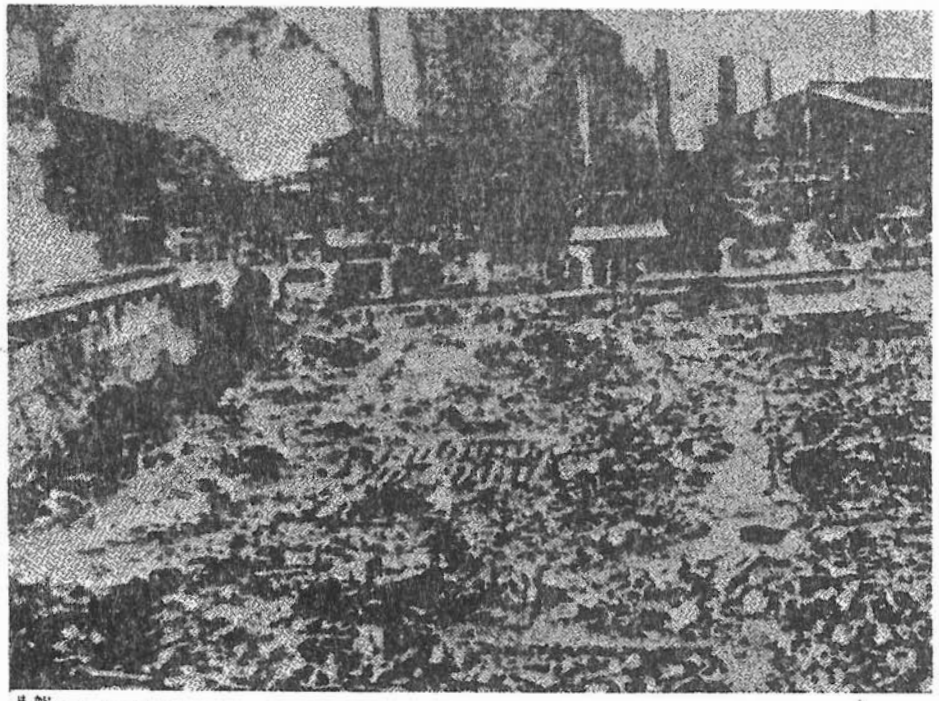




釜石市の海岸近くまで米艦隊が近づき、艦砲射撃を浴びせた。



青森駅前にも防空壕が掘られた

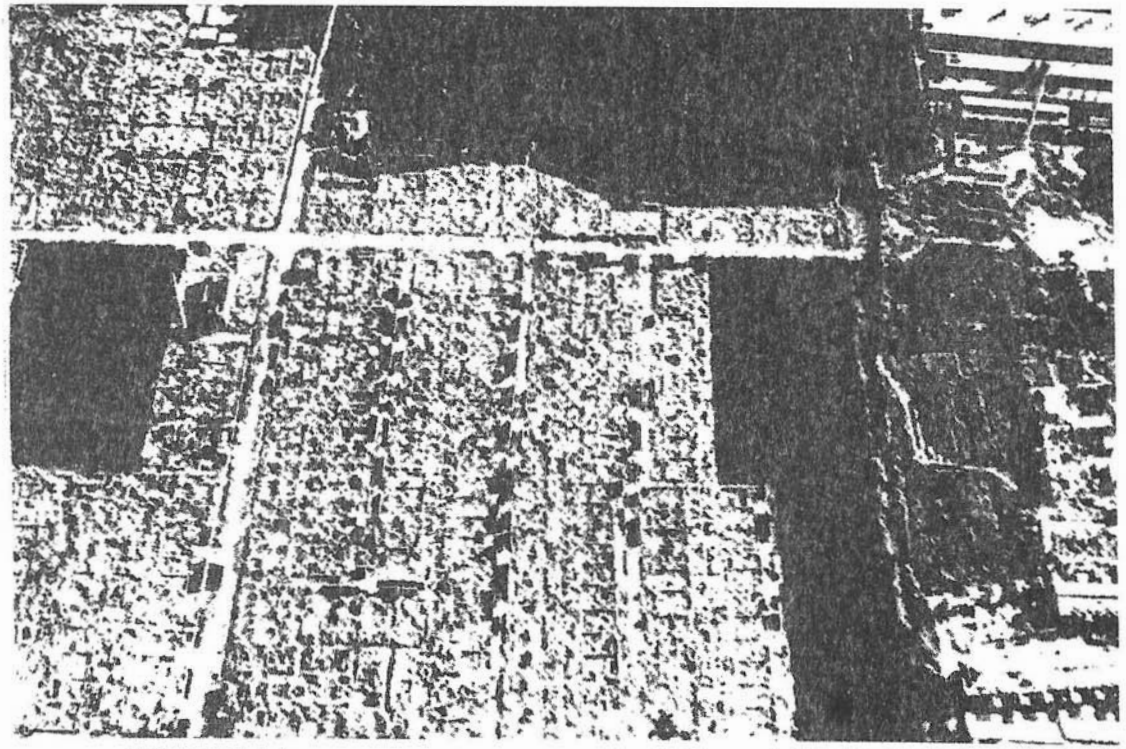


被爆者の大船渡市街跡

29六三機が来襲し、死者七三三人を出した。青森の場合、米軍が空襲予告ビラをまいていたため、避難・疎開した市民も多くいた。しかし、県知事がこれをとがめて配給物資停止の通告を出したので、止むなく市内にもどった住民も空襲にあい、焼死者を増やすという悲劇になった。

七月一四、一五日の艦上機来襲は、広い東北の農村、漁村、山深い町や村のあちこちまでも恐怖におとしいれた。二〇〇〇機あまりの艦上戦闘機が、主に東北北部沿岸部――青森の青函連絡船（一一隻沈没）、八戸、三沢、石巻、気仙沼、秋田、山形も銃爆撃した。釜石には海上からの艦砲射撃もあった。

八月九、一〇日にも東北地方全域に二〇〇〇機の艦上機が来襲、一ノ関、花巻、山形、酒田、神町、真室川、新庄、小牛田、気仙沼、郡山、須賀川、白河、横手などに飛びかい、銃弾を浴びせた。人影はもとより、動くものはすべてねらわれたような一斉掃射だった。五人、一〇人という犠牲者が各地に出、宮城県下では、林に逃げこんだ子どもや田の草取りの主婦までもが銃撃されて死んだ。


日立市の焼けあと

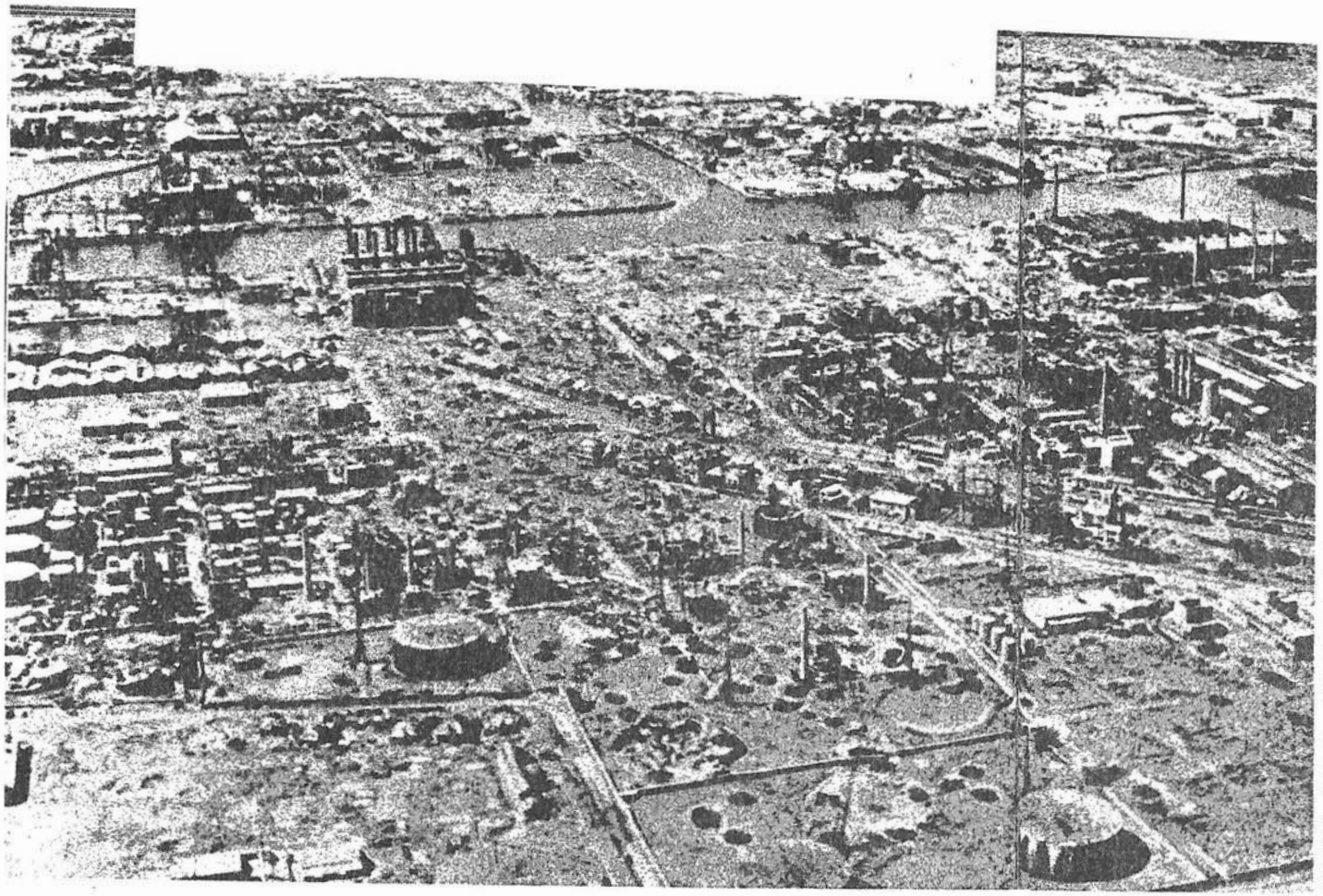
関東地方の空襲

太平洋上の米第五艦隊の空母から飛び立つ艦上機が、一九四五年（昭和二〇年）二月一六日、一七日、二五日に来襲し、関東の上空を飛びまわった。

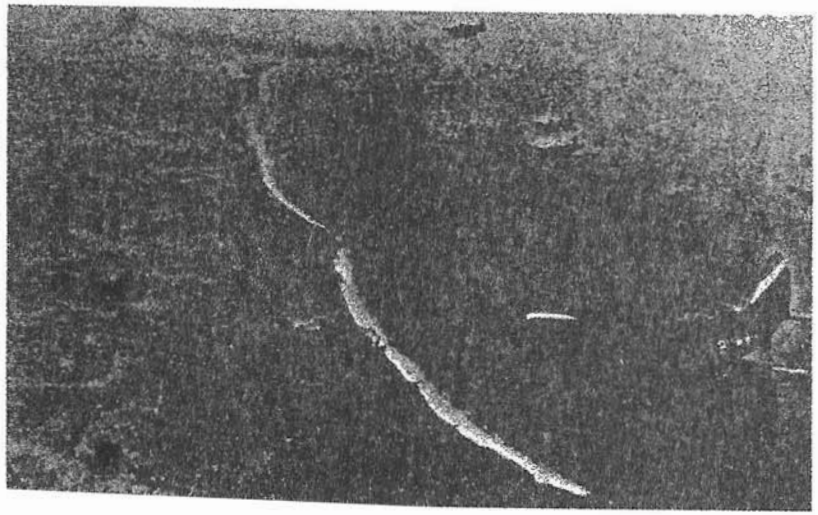
グラマンF6F戦闘機（最大時速五九四キロ）や同TBF攻撃機（最大時速四三〇キロ）にすれば、関東各県はまさにひとまたぎ、急降下しては機銃掃射を繰り返し各地の人々をふるえ上がらせた。

それより前、B29爆撃機によりはじまった本土空襲は、関東地方では東京都下武蔵野町（現在の武蔵野市）の中島飛行機工場が最初からしつようにねらわれ、一一回の最多目標爆撃を受けた。

B29は、気象条件などが悪くて第一次の目標地を爆撃できないとき、第二次目標地を含め、任意に他地区を爆撃していた。これが〝盲爆〟となって、東京の市街地や立川、八王子、千葉県の市川や松戸、埼玉県の川口、川越などが空襲され、被害を出していた。



燃弾と焼夷弾で破壊された川崎・臨港地帯



また、群馬県の中島飛行機太田製作所（二月一〇日、以後六回）や東京立川の立川飛行機、日立航空機（いずれも四月）が併行して目標爆撃された。

大都市じゅうたん爆撃が、東京、川崎、横浜などにおこなわれたあとの六月半ばから、B29機群は一〇〇機近い編隊で来襲し、全国の中小都市や軍需工場をしらみつぶしに爆撃するようになった。

関東地方では、六月一〇日に茨城県日立市が空襲され、七月に入ってからは各地が次々と爆撃された。主要都市の主な空襲日と被害は次のようになる。

千葉市（7月6日）
B29 124機来襲、死者936人

宇都宮市（7月12～13日）
B29 120機来襲、死者521人

日立市（7月19日、空襲と艦砲射撃）
B29 127機来襲、死者1575人

銚子市（7月19～20日）
B29 91機来襲、死者332人

八王子市（8月1～2日）
B29 169機来襲、死者60人

水戸市（8月1日）
B29 99機来襲、死者242人

前橋市（8月5日）
B29 92機来襲、死者535人、高崎市も同時に被害を受け、死者17人

熊谷市（8月14日）
B29 82機来襲、死者242人。伊勢崎市、高崎市も同時に被害を受ける

中部地方の空襲

爆弾や焼夷弾を雨のように降らせて多くの人を焼き殺し、戦争がいやになる作戦〝戦略爆撃〟を実行したのがB29爆撃機である。マリアナ基地のB29機群は、東京、名古屋、大阪、神戸の四大都市を大空襲した後、沖縄戦を支援するために九州、四国にある飛行場を爆撃し、再び都市に焼夷弾爆撃をはじめた。

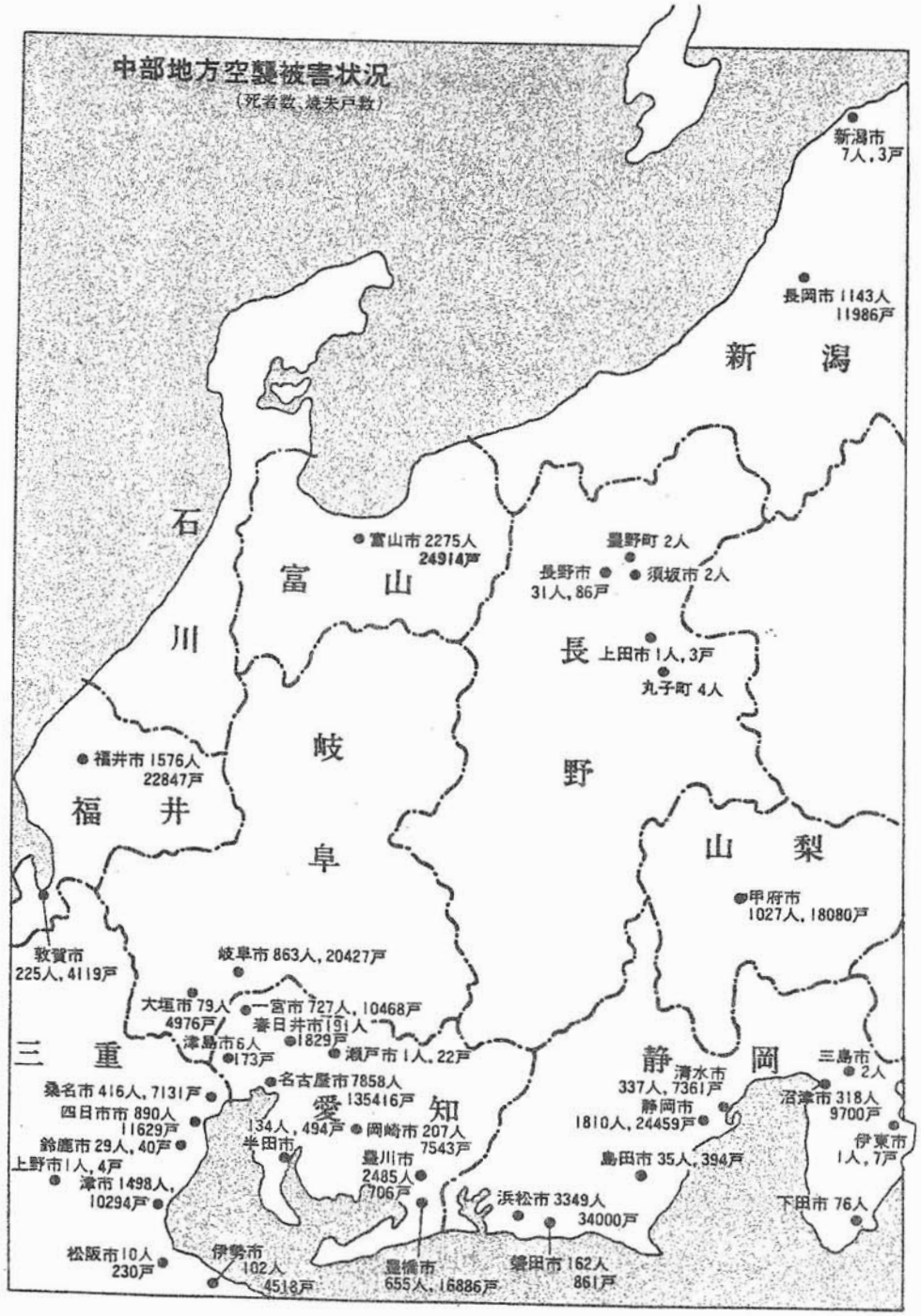
名古屋がまた最初の目標都市となり、五月一四日、一七日と大空襲を受けた。愛知県下では豊橋（六月二〇日）や岡崎（七月二〇日）なども空襲された。また、豊川市では海軍工廠（軍需品を製造する工場）が爆撃され、動員学徒が多く死んだ。

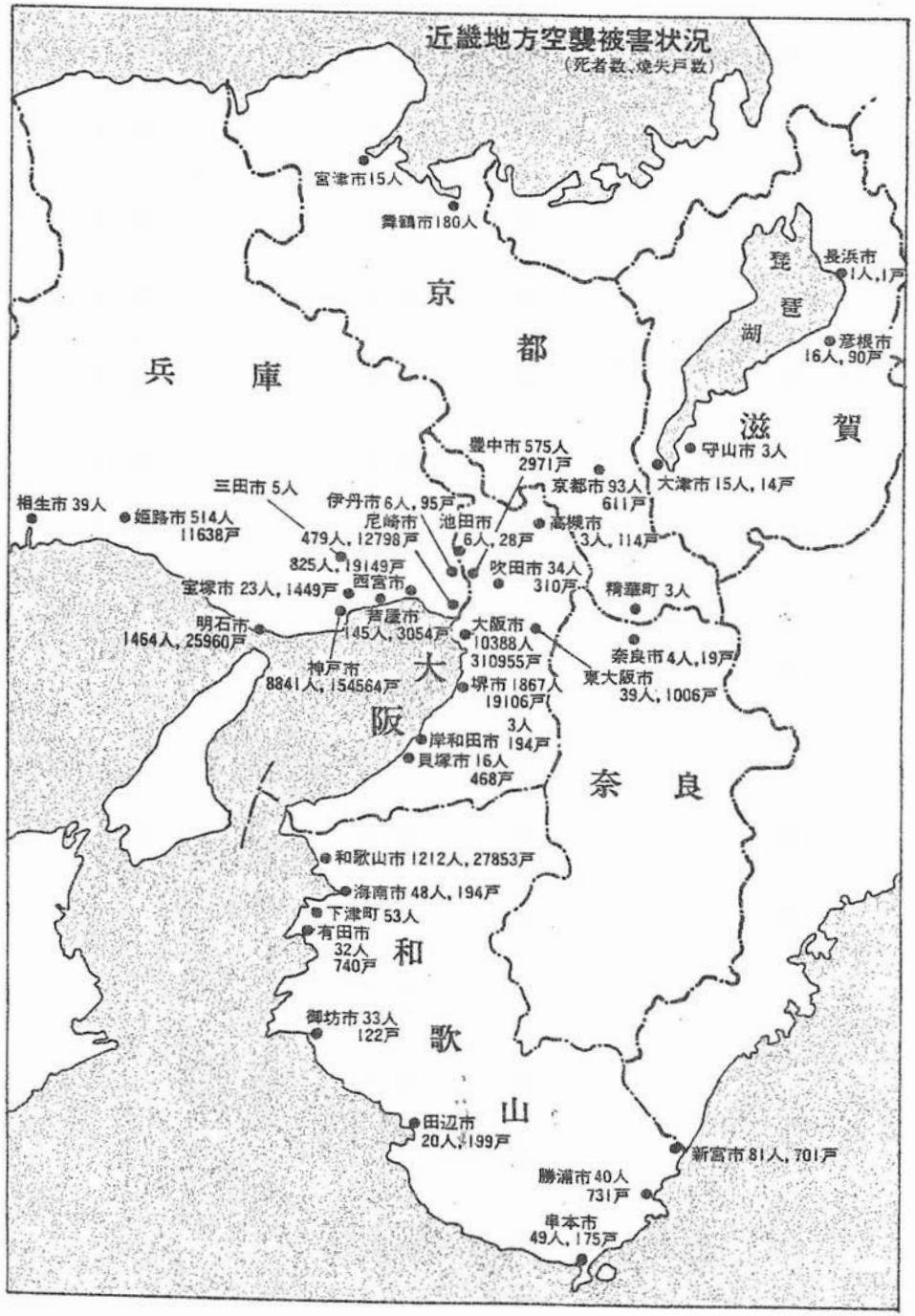
静岡県では、静岡市とともに浜松市が大空襲され、日本の中小都市としてはもっとも激しい戦災に見舞われた。B29爆撃機の目標都市とされるとともに、ほかの都市に目標爆撃できないときに、〝身がわり〟にされ、艦上機にねらわれ、さらに海上から艦砲射撃されるというものだった。

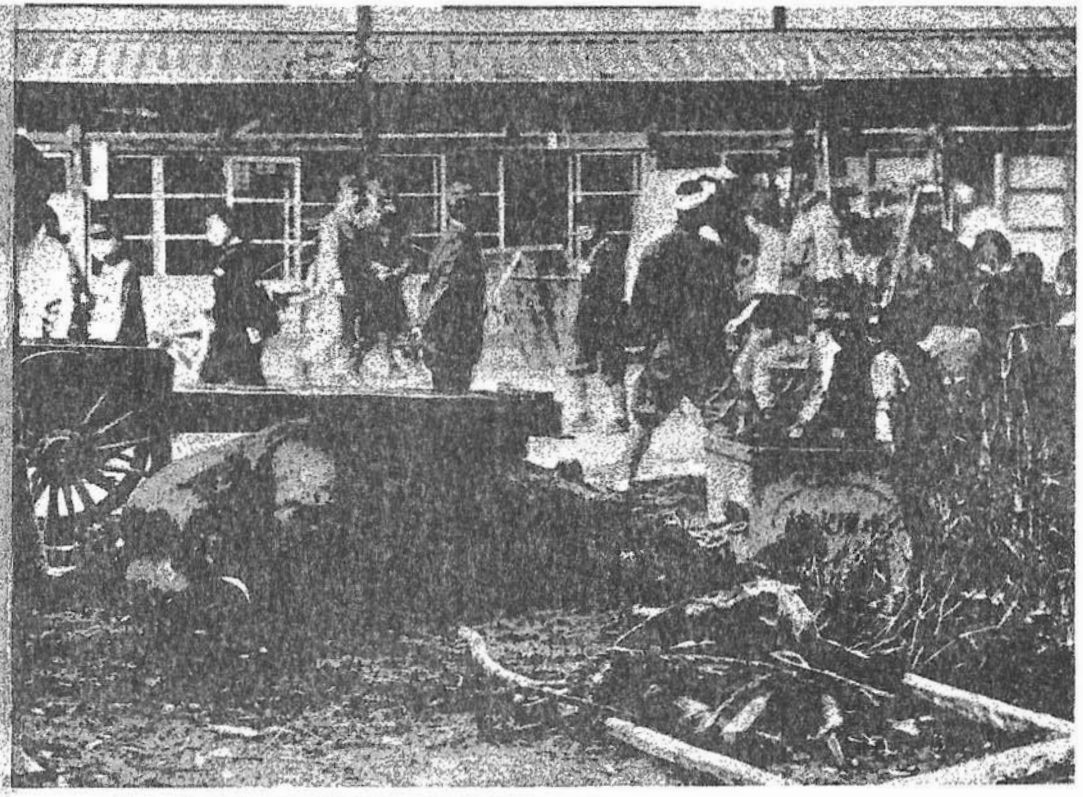
福井市は一回の空襲で全市の九六％の家屋を焼失した。これは、東京・八王子市につぐ最大の被災率だった。

主要都市の主な空襲日と被害は次のようになる。

名古屋市（3月12日）
B29 288機来襲、死者519人
浜松市（6月18日）
B29 130機来襲、死者1720人
四日市市（6月18日）
B29 89機来襲、死者799人
静岡市（6月19日）
B29 123機来襲、死者1669人
甲府市（7月6日）
B29 131機来襲、死者1027人
岐阜市（7月9日）
B29 129機来襲、死者863人
福井市（7月19日）
B29 127機来襲、死者1576人
津市（7月24日・28日）
B29 113機（24日）・76機（28日）来襲、死者1239人
富山市（8月1～2日）
B29 174機来襲、死者2275人
豊川市（8月7日）
B29 124機来襲、死者2485人
長野市（8月13日）
艦載機来襲、死者15人







爆風で飛ばされて死んだ荷馬車の馬。豊川市の産業道路で

近畿地方の空襲

B29爆撃機は、一機が三八四〇発の焼夷弾を積み、何機もが並んでじゅうたんをしくように焼夷弾を落としていった。高熱を発して燃える焼夷弾を都市空襲に使ったのは日本軍が最初で、米軍はこれを真似し、大型油脂焼夷弾（ナパーム弾）を開発して大規模化したのである。

一九四五年（昭和二〇年）三月一七日未明、東京、名古屋、大阪の三大都市につづいておこなわれた神戸空襲は、それまでにない激しいものだった。来襲したB29約三〇〇機は今までと変わらない機数だったが、焼夷弾はそれまでより五〇〇トンも多い二三五五トンにものぼった。神戸の街の西半分を焼いてなお、くすぶりは一週間もつづいていた。後の空襲被害も含めると、神戸の死者は八八四一人、五大都市中最悪の被害率だった。

これより前、一月一六日の真夜中、京都市内東山区馬町などにB29一機から爆弾が投下され、死者四一人を出す最初の京都空襲があった。アメリカは、古都京都を守るために爆撃目標からはずし

神戸市内の破壊された工場あと。捕虜収容所（PW）が上方にみえる

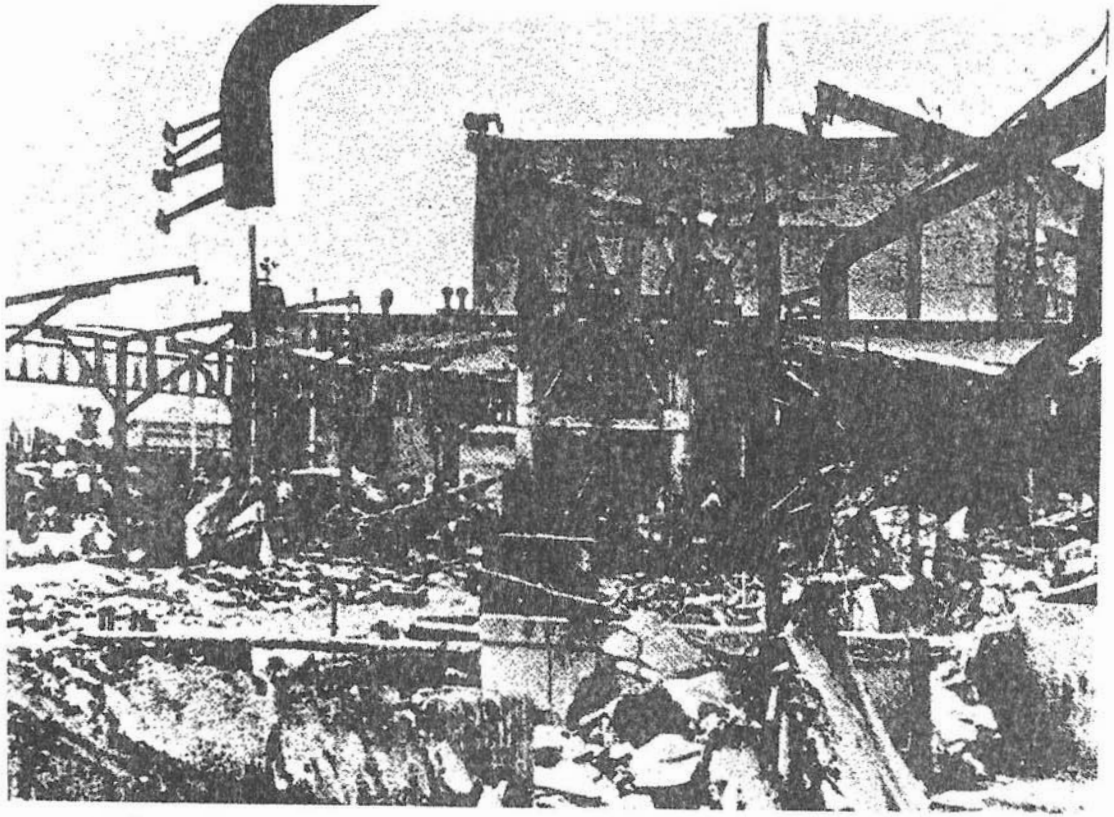
撃ついされて炎上したB29の残がい（布施市＝現在の東大阪市）

たとか、この一回の爆撃も誤爆だったとかいわれたが、死傷者を出す被災のあったこと、さらに六月にも上京区が爆撃されて死者を出していることも事実だった。京都府下を含めれば、三〇〇人に近い犠牲者を出している。

奈良では古社寺の宝物や仏像を空襲から守ることに必死の努力が払われたが、それはたいへん難しいことだった。戒壇院の四天王は「動かすとくだける」というので疎開を避け、唐招提寺の鑑真和上像は寺と運命をともにするということだった。東大寺法華堂の仏像は、移動さわぎでずいぶん痛んだといわれる。戦争は文化を破壊し、人を殺すのに容赦ないのである。

主要都市の主な空襲日と被害は次のようになる。

大阪市（3月14日未明）
B29 279機来襲、死者3115人
神戸市（3月17日）
B29 307機来襲、死者2598人
姫路市（7月3日）
B29 106機来襲、死者173人
和歌山市（7月9日）
B29 108機来襲、死者748人



焼けおちた岡山駅

中国・四国地方の空襲

米軍の沖縄作戦支援のために、一九四五年（昭和二〇年）三月半ばから五月中旬ごろまで、広島県の呉がひんぱんに空襲され、山口県の下関には機雷が投下され、四国の基地が爆撃されるなど、中国・四国地方の空襲も本格化していった。

三月一九日、土佐沖の米機動部隊から呉へ、グラマンF6F戦闘機のべ三五〇機が来襲した。これが、中国地方最初の本格的な空襲であった。呉は、人口約一五万人の小都市であったが軍港であり、海軍工廠などの軍需施設などもあった。

五月五日にはマリアナ基地からB29爆撃機一五二機が来襲し、爆弾や焼夷弾など五九四トンを呉に投下した（六、七月にも三回の大空襲があった）。

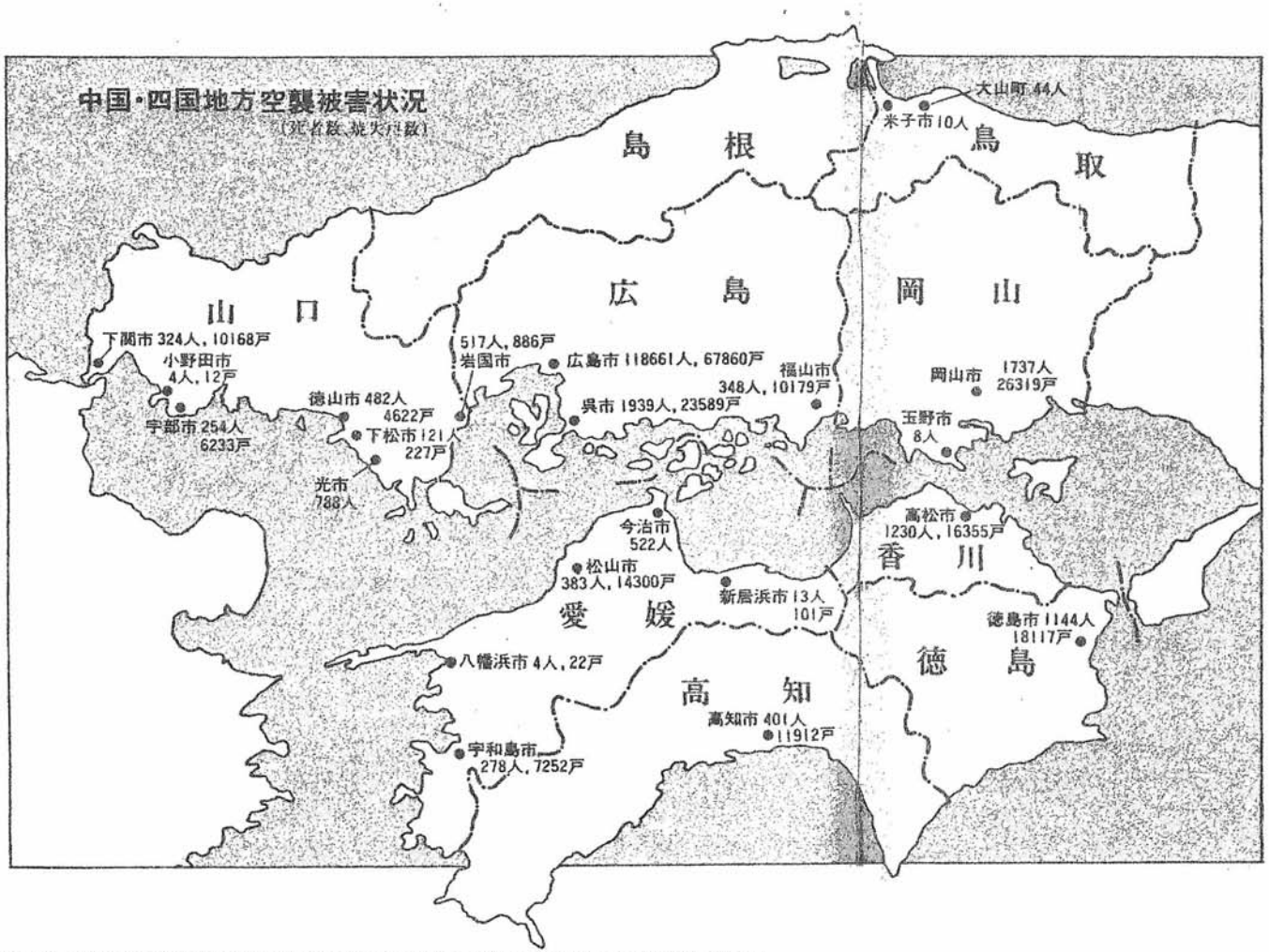
三月二七日夜、B29九四機が、下関から九州の

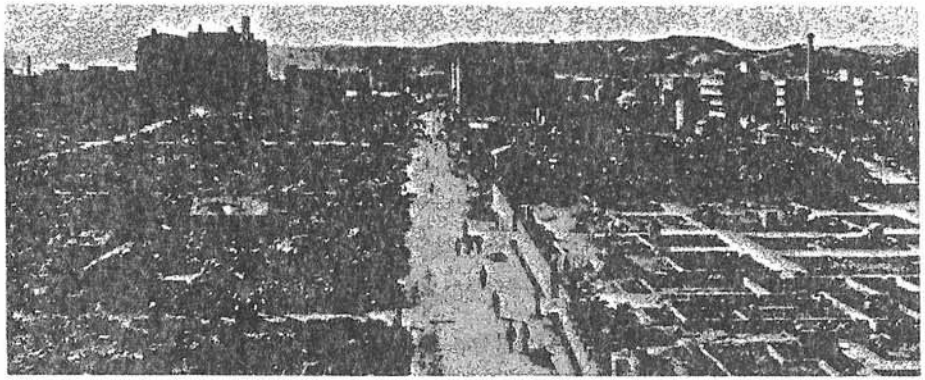
港湾に機雷一〇〇〇個を投下した。四月一日からはじまる沖縄作戦のため、下関海峡を封鎖して艦船の移動をできなくするためだった。市民ははじめ、B29来襲の目的が何のためかわからなかったが、関門港の船は次々と機雷にふれて沈没し、「船の墓場」といわれるほどになった。

沖縄作戦と大都市空襲が終了した六月半ばから中国・四国地方の諸都市も相ついで空襲された。主な被害をあげてみると、次のようになる。

なお、ほかに鳥取県下で七月二八日に列車爆撃で三九名の死者が出、そのほかにも被害（境港で火薬庫が爆発、死者一二〇人）があったこと、島根県でも七月に戦闘機による空襲があったことが記録されている。

岡山市（6月29日）
B29 138機来襲、死者約1200人
高松市（7月3日）
B29 116機来襲、死者1230人
徳島市（7月3日）
B29 131機来襲、死者984人
高知市（7月3日）
B29 125機来襲、死者401人
徳山市（7月26日）
B29 98機来襲、死者482人
松山市（7月26日）
B29 128機来襲、死者251人
福山市（8月8日）
B29 91機来襲、死者348人





九州地方の空襲

暗闇の空に重々しい爆音を響かせて、「超空の要塞＝スーパー・フォートレス」といわれたB29爆撃機がはじめて日本本土に姿を現した。一九四四年（昭和一九年）六月一六日、現在の北九州市の上空を飛行する姿は、照空灯の交差する光にとらえられて金色に輝いていた。中国の成都基地から飛来した四七機は、日本最大の製鉄所である八幡製鉄所を目標に投弾したが、五発しか命中せず、あとは八幡市内、小倉、門司、若松市などに落下、さく裂し、二〇〇人をこす死者を出した。

一九四五年（昭和二〇年）に入ると、米軍は基地をマリアナに移し、沖縄戦を支援するために九州の基地を爆撃し、沖縄占領後は沖縄基地から戦闘機と爆撃機による戦爆連合で攻撃してきた。長崎の被爆を頂点に、都市、基地周辺、離島にまで及ぶ九州全域が二四時間空襲にさらされていた。

"東洋一"の飛行機工場といわれた長崎県の大村海軍航空廠は五回も空襲され、一四、五歳の男女動員学徒の多くが犠牲になった。また、大分県四浦半島突端の保戸島（現在の津久見市）では、七月二五日、国民学校（現在の小学校）が直撃弾を受け、先生・生徒一二七人が即死、校庭は血の海になった。

九州・十大都市だけの被害状況をみても、相当な死者数にのぼる。

鹿児島市（6月17日）
B29 171機来襲、死者2316人
福岡市（6月19日）
B29 221機来襲、死者902人
佐世保市（6月28日）
B29 145機来襲、死者1030人
門司市（現 北九州市）（6月28日）
B29 92機来襲、死者55人
延岡市（6月28日）
B29 126機来襲、死者217人
熊本市（7月1日）
B29 155機来襲、死者469人
大分市（7月16日）
B29 131機来襲、死者177人
大牟田市（7月27日）
B29 125機来襲、死者780人
佐賀市（8月5日）
B29 63機来襲、死者51人
八幡市（現 北九州市）（8月8日）
B29 221機来襲、死傷者2500人

沖縄の空襲―地上戦の前ぶれ

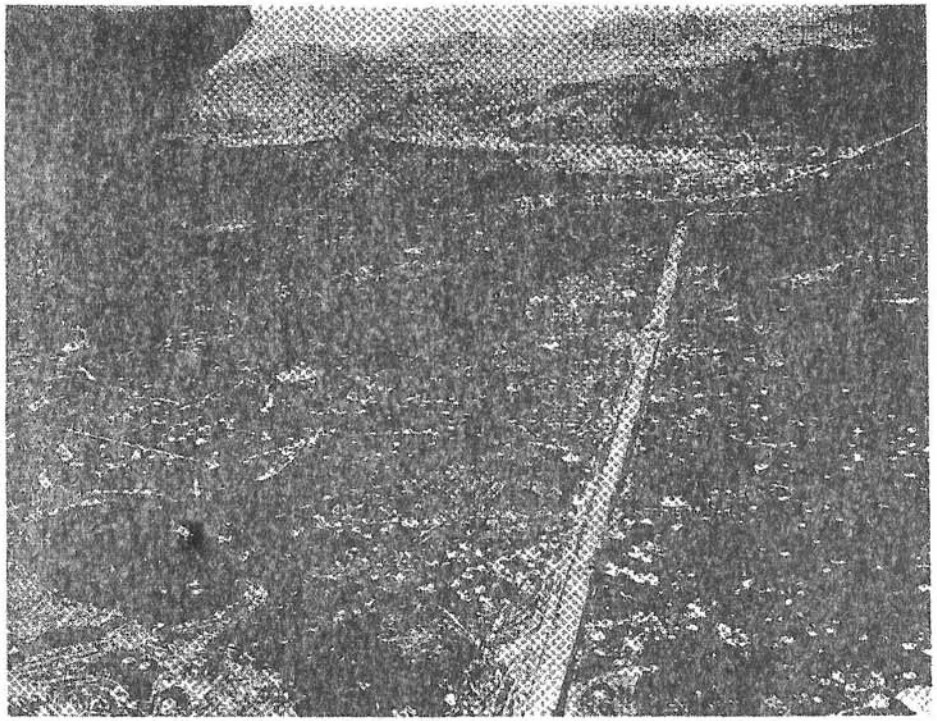
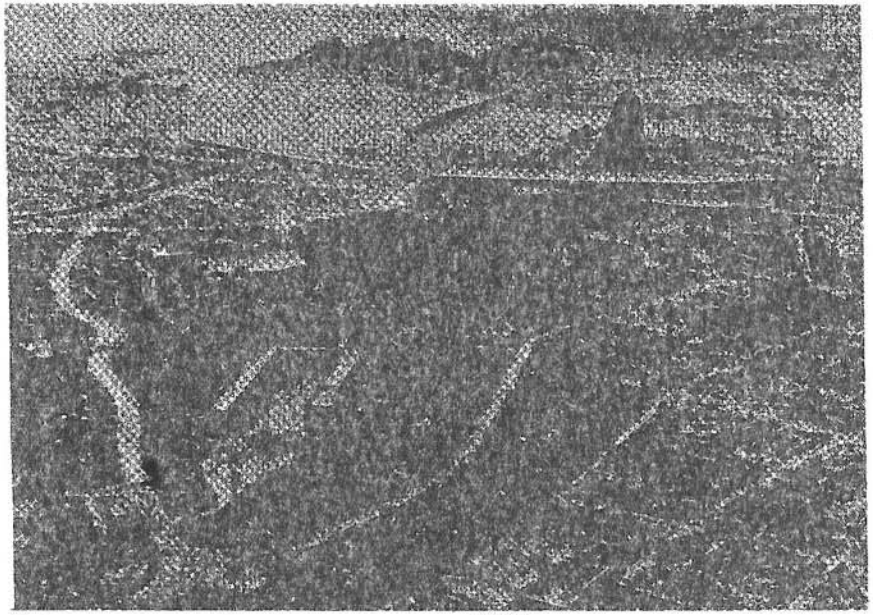
敵の侵寇四次に亘り
艦載機四百名遂
敵機廿六以上を撃
沖縄等に来襲
敵
我被害軽

10・10空襲を報じる朝日新聞西部版

サイパン島が米軍の手に陥落した一九四四年（昭和一九年）七月、沖縄に老幼女子の疎開命令がでた。米軍が沖縄へ上陸するのはまちがいないと考えられたからである。

そんなさなかの一〇月一〇日朝六時半、米機動部隊から発進したグラマン戦闘機約一五〇機が、那覇市を中心に沖縄一帯を襲った。空襲警報が発令されたのは七時近くになってからで、それまで人々は軍の演習だと思っていた。空襲は夕方六時まで絶え間なくつづき、那覇市内は炎につつまれ、軍人や住民六〇〇人が死亡した。日本軍は応戦するいとまもなく、那覇港に野積みされていた弾薬や軍需物資を焼かれて大打撃をうけた。

夜になると、米軍が上陸するという噂が広まった。島南部の人が北部へ避難するために道路は人でいっぱいになり、そのなかを武装した兵隊や物資輸送のトラックが走りまわり、那覇市内は大混乱におちいった。この噂はデマだったが、この一〇・一〇空襲は住民に大きなショックを与えた。それもしかし、半年後の沖縄戦の前には小さな悲劇にしかすぎなかった。


艦砲射撃のすさまじさを物語る弾のあと